

現代を生きるネーシ 島と都会の狭間で

川崎史人

Present-day Neechi : In an Island and City Interval

KAWASAKI Fumio

- ① はじめに
- ② トカラ列島の概況とネーシ
- ③ A姉の生活史
- ④ 成巫とシケをめぐる考察
- ⑤ 水晶の導入と祭祀の変化
- ⑥ 島への憧れと疎外感―結びにかえて

【論文要旨】

本稿は、故郷を離れて都会で生活しているシャーマンが、どのように故郷の「伝統」を継承しつつ、都会の影響を受けながら故郷の神と交流を続けているかを考察する。故郷の神を拝むという伝統を志向する意識と、都会で生活することで人や情報に多く接する現実のなかで、トランスを中心とした交流のあり方やその変化に注目する。

本稿で考察の対象とするのはトカラ列島・石島出身の一女性（A姉と称す）である。トカラ列島では、ネーシとよばれる女性が村落祭祀にもかかわりながら神との交流を続けてきた。A姉も、若くして神が乗り、将来は有望なネーシとして島の人々から期待されていた。ところが、当時すでに大阪で生活しており、島を離れて暮らさざるを得なかった。

その後十七年間、都会で生活しながら神との交流を続けるが、身体の不調を常に

訴えていた。大病を経験するたびに島へ帰って神楽をあげ、身体を正常な状態に戻す生活が続いた。ようやく交流が安定してからは、風水の考えを取り入れ、水晶球を通して拝むようになった。これはA姉の身体を非常に案にさせ、都会で拝むうえでの障害を取り除いてくれた。しかしトランスなしで神と交流する方法を中心とするなど、ネーシとしてのA姉のあり方を大きく変えることになった。

A姉の場合、こうした変化と関連するのは、故郷との距離感である。これは、神がいる故郷での生活への憧憬と、伝統的な生活から乖離してきた現実の故郷への喪失感との相剋を通して形成されていった。島の神を大切にし、故郷の喪失感が強くなる分、A姉の信仰は強くなる。しかしそのことがまた現実の島社会との距離を広げ、疎外感を増すことになってしまった。こうしたジレンマを、A姉の語り口を通して論じた。

①はじめに

「先代世時の法度のままに」トカラ列島あくせきしま悪石島で話を伺っていると、神事に熱心な方が筆者に話してくれた言葉だ。「昔の神の世から続けられている決まりを、今も変えずにずっと維持する」意味だという。神事はまさにこれが必要で、昔から伝わる伝統をそのまま受け継いで、神のために執り行わなければならない。

ところが悪石島には、「申しはずしは御座居ましても、受け取りはずしは御座居申さぬ様」という言葉もあり、祭祀で唱えられている。「人間のやることに間違いはあるから、型どおりにいかないかも知れない。もし不備があっても、神はどうか怒らないでほしい。でも、こちらが行ったことはきちんとすべて受け取ってください」という意味である。これによって、人間の都合で祭祀を変更することも許されることになる。そして実際に、情報が流れ込み、人口が減少し、生活の仕方が大きく様変わりしていくなかで、祭祀の形式も内容も変化した。今日の実状にあった方式に変更しているのである。

トカラ列島にはネーシとよばれる女性がいて、神と直接交流し、島の祭祀や人々の不安の除去に対応してきた。しかし時代の変化にともない、ネーシの姿はほとんど見られなくなった。悪石島では今日、神と交流していることを公言する者はいない。即ち表面的にはネーシはいなくなつた。したがって祭祀もネーシ抜きで実施され、本来ネーシが唱えるべき祝詞のノートを置くことで対応している。これも実状にあった方式への変更である。

奄美・沖縄地方であれば、祭祀にかかわるノロと、祈祷などにかかわるユタとが機能分化しているので、ノロが不在になってもユタは健在ということもあり得る^①。しかしトカラ列島の場合、両機能が同一人物に

よって担われるために、神懸かりできるネーシの不在は、祭祀役も祈祷などを担える者も両方同時にいなくなることを意味する。特にここ数十年でネーシの数が急速に減少してきているので、神懸かりできるということは、村役のネーシを任される可能性が高まることになる。ネーシであることを公言する者がいないというのも、時代に逆行するようで恥ずかしいからというだけでなく、村落祭祀にかわり続けなければいけない精神的負担も大きいためと考えられる。

小論では、こうした現状のなか、ネーシであることを公言し、神への信仰を守り続けている悪石島出身の女性に焦点をあて、ネーシとしての神との交流の諸相と、現代における信仰のあり方を考えていきたい。考察の対象となるこの女性（以下A姉あにと記す）は現在悪石島の居住者ではない。島を離れて以降ネーシになったが、神との交流が思うようにできずに悩むこととなった。それでも信仰をすてず、神との関係を保持している。一体、A姉にとって神とは何であり、どのような思いでネーシであり続けているのか、「先代世時の法度のままに」神を祀るのにどのような解釈をしなければならなかったのか、都会で暮らすことがA姉の信仰にどのような影響を与えているのか。これらを通して、上述の問題を考えていくことにする。

この調査は、一九七九年以降、主として一九八三年～八六年、二〇〇二年～〇六年に行われた。二〇年の時を隔て、A姉の信仰や語りには変化が認められるが、その変化も考察の対象となる。

②トカラ列島の概況とネーシ

トカラ列島は、鹿児島県の屋久島と奄美大島の間に点在する島々で、行政区画は十島村である。現在には有人島が七つあり、定期船が週に二～三回、往復している。いずれも小さな島で、人口は十島村全体でも千人

を割っている。

生計活動は、主に漁業と自家経営程度の農業であった。離島振興法が一九六一年に適用されてから、牧畜業や紬織業が入り、さらに港湾・道路建設などの公共事業が投入された。今日では、牧畜や漁業、特産物による収入増を軸とした振興策が展開されている。

トカラ列島の島内には神の祭祀所が多くあり、季節毎の大祭や各種神祭が年中行事として比較的多く催されてきた。⁽²⁾ 祭祀は神役を中心に執行される。この神役を選ぶ方法は、一般的にはお饒という方法がとられる。盆皿に個人名を書いた紙を撚って置き、その上で御幣をゆつくりまわすと、御幣に紙が吸い寄せられる。そこに名前の書いてある人が「神に選ばれた人」で、神役として一年間、村の祭祀に奉仕することになる。

女性神役はネーシから選ばれる。ネーシは神との交流（憑依）を通して、病氣治療や村落祭祀など多くの場面で人々の生活と関わってきた。神が憑依した当初のネーシの活動は個人的なもので、家族や親戚のために拜んでいるのだが、多くの島においては、その中からお饒によって神に選ばれた者が村役のネーシになる。

しかし生活スタイルが現代化し、外部との交流が頻繁になるにつれて、このような女性宗教者の存在は、一部の島を除いて存在しなくなってしまう。

悪石島の場合でも、一九七〇年に始まる沖繩向け無線電波中継所の建設工事（いわゆる御岳工事^{みたけ}）で多くの作業員が入ってくるなか、村役のネーシは姿を消している。それ以降は、個人的に拜む者はいるが、村役を務める者はいなくなかった。個人的に拜む者も、拜んでいること自体、積極的には口外しなくなっている。

ネーシについては、下野敏見（一九八二）・安田宗生（一九七二・一九七四）による詳細な報告がある。筆者も以前、ネーシの儀礼を通してトランスと神観念を分析したことがある（川崎 一九八七）。また、田中正

隆はネーシを含めた近年の祭祀状況の持続と変化を村落社会のなかで検討している（田中 二〇〇五）。これらによってネーシの成巫や機能はほぼ明らかになってきた。しかし、これらネーシが一人の女性として、どのように神と向き合ってきたのかという生活史の視点は抜け落ちていたように思う。そこで、ここではA姉の生の声を載せながら、A姉の信仰心や葛藤を描き出すことをめざしたい。それを通して、今日の状況下でネーシであり続けることの意味を見いだしていきたい。⁽³⁾

以下、A姉の生活史を繙くに当たり、主なネーシはアルファベット一文字で示すものとする。その他の人物は、必要に応じて仮名で表した。

③ A姉の生活史

（一）子供時代

A姉は、篤実で信心深い父、長年村役のネーシを勤めた母（E婆^{ばあ}）の五女として一九四一年六月に生まれた。生まれからして不思議だったと、A姉は次のように語る。⁽⁴⁾

「私がちっちゃいときから、不思議な生まれをしている、というのが、今で言ったら仮死状態で生まれた。真っ白しとったというですよ。仮死状態といったら、（悪石島は）無医村やし酸素（マスク）もないところだから、死んで当然なんよね。で、一時間くらい、大きなサンメダルというてね、大きな鍋の蓋があるんですよ、薬で作った鍋の蓋。その鍋の蓋でね、産婆のかわりのヘソババといいますねん、臍とつてもらうから。（その人が）すぐくもう、鍋の蓋で扇いだんだって、ずっと。そしたら産声あげたんだって、はじめて。一時間後に。『いやあ、この子は死んだもんが生き返った』という

ことだね。」

A姉は、生まれつき視力も弱かった。母E婆はA姉を、どこへ行くにも連れて行った。ネーシであるE婆は、神を拝みに行くときもA姉を連れて行き、A姉をおぶったままシケ(トランス)がかかっていたという。そんなときのA姉は機嫌がよかったらしい。「この子は神に近づく機嫌が良い、神から遠ざかると元気がない」と小さいときから言われていた。そのためか、A姉が語る子どものころの話は、神を感じたという話が多い。

「二つか二つ位のときにね、夜中になったら私、泣くんだった、毎日。もう毎日泣いて。そしてね、もうどうしようも治らんで、それで△N△の庭を踏んだら泣きがとまったんだって。母がおんぶしとって、その庭に行くでしょ、そしたらびたっと泣きが止むんだって。そして今度ね、もう泣きが止んだから、家に戻ろうといったらまた泣くんだった。そしてその家に行って毎晩その神さんと遊ぶんだすね。毎晩(その家の)おばちゃんが、ネーシをしてみしたが、私をお祓いしてくれてね。もう毎晩通ったそうすよ。ずっと続いていたと言っていましたよ。あんたはそう言う子やったでって……。」

「やっぱり違っていたんだって。私は分かんのですけど、することなすこと、神に近い。人は寒かったら厚着するでしょ。でも私は、何か穴のあいた破れたもん一枚だけ着て、寒いはずなのに寒そうにせんで。やっぱりこれは神が授けた子だろうと……。」
「(姉⑭)と結婚して島に住み始めた義兄⑬が、慣れない神役を務めていたとき、わたしの胸にビピーっときて、これは神様にご無礼なのになあっと、母に神様から知らせがあるなあと思ったんです。わ

たしの胸はどきどきどきどきしていたんですよ。あれ、兄ちゃん
は務めていないじゃないかなあという感じがして。ご飯食べるとき
なんか感じるわけよ。神様はどう思われるかなと思っとったら、お
母さんに(神が)かかったわけよ。『チブサの父はまだ若年やから
許してください』って、お母さんが頼んでいました。」

このように、A姉は、周囲の者から神に結びつけられて語られていた。目が不自由な分、「世の諸々が見えないので、神の方を向くのが早い」と、C爺はA姉をそのように評し、「その力は自分を超える」と言っていた。「生理前は予知能力も強かった」とA姉は言う。家族や親戚に目の不自由な人がいないのにA姉だけがそうなのは、「やっぱりこの家に高い神の知らせがある」ためではないかと解釈されていた。

A姉は島の小学校に通っていたが、目が不自由なため教科書もろくに読めず、「遊びのようなものだった」という。ただ国語だけは母が読み聞かせたものを覚えていたので、授業中に指名されたとき、非常に早くそらんじることが出来た。ページの終わりまで一気に「読む」ので、他の友だちは早すぎて活字に追いつけないほどだったという。

一九五二年に十島村が本土復帰した⁽⁸⁾。鹿児島に盲学校があることを知り、翌年、小学校五年だったが盲学校の小学一年生として入学し、一から勉強し直した。中学はそのまま鹿児島盲学校に進学し、その後あんま科コースに二年間通った。この間、夏休みなど長期の休みには島へ帰っていた。そのころ、島にはネーシババがたくさんいて、祭のときなどにはシケのかかった状態で、A姉のまわりに集まってきていたという。「そんなときは、私にも思わず神が乗りそうになりました。そのころから、神が乗ってほしいとは思っていました」という。

卒業後、鹿児島島の治療院に就職したが、間もなく実兄⑩を頼って関西(以後、大阪と表記)へ行った。最初の二年間は、先輩の紹介で西宮に

ある関西盲婦人本部で働いた。

一九六五年、兄姉⑪⑫の紹介が縁で、沖縄宮古島出身の男性⑬と結婚した。姓を変わると先祖と離れるような気がしたので、夫に入籍してもらった。

このあと、天理教のお席運びをした。姉⑫が奄美大島名瀬の人と結婚し、その関係で入信していたので、A姉も、姉に勧められるままに大阪の天理教教会に通った。天理教の巫女さんにも、「悪石の神につながるから」といわれ、通っていた。

ところが、そのころから次第に身体がおかしくなってきた。親戚の者に「島へ行つて神楽をあげてもらえば？」といわれ、島へ帰ることにした。

(二) 最初の憑依体験

一九六七年十二月、夫と伴に初めて帰省した。

島はちょうど霜月祭の季節だった。あいにく生理中でどこにも行く気はしなかったが、△K△では孫⑭の初年の祝や親戚2名のカネツケ祝をやるというので、父に言われてしぶしぶ行くことにした。ここで初めて、A姉に神が乗った。乙姫神という、島のヒガシに祀られ、島でもっとも霊力が強いとされる女性神だった。

「そのとき私にね、神様が乗るとは夢にも思ってたんで……。ただそのときにね、予感みたいなものというか、鏡を見ていたらね、ぼろぼろぼろぼろ、涙が出て来るんですね。おかしいなあ、お祝いに行くのに、何かね、何とも言えん、懐かしいような、愛しいような、何ともいえない、寂しいような……、神様の言葉で言えば、『さてアジキナヨ』という言葉があるんですけれども、その感じだったと思うんです。ほんで、行つて、しばらく座つて。そこではカ

ネツケ祝もあったんですね。昔と違って、それはただもうお祓いだけで、初歳の祝が中心だったんですがね。カネツケ祝して、ネーシババが二人をお祓いしていたんですね。そしたら、ネーシババの一人がシケかけて、ほいで『A姉にがつつかかるとある』とかいう感じで、私の方に向いて来たんですね。そしたら、私が辛抱しとつたんやけど、私がバーと、シケかけて……。それが乗り始めです。その時に二人の女の子、ゴソゴソと這うようにしてその場から逃げたんですよ。

私に（神が）かかるということで、今度は神様（ネーシ）のところに連れて行かれたというか、場所を移つて。ほんでその時は、うちのお母さんやら、他に何人もいはつたですよ。そのときに、私は覚えているんです。なぜか知らんけど、『島や常世の数多数多、シヨウと取れ、誠と取れ』と言って飛び上がつて。その時島中の人が集まつて来ていたから。それで、ネーシババの一人が『そら、やつぱり乗つたやろ』という感じを言わはつて。『この子には神が乗ると私は言うとしたぞ』つて。ほんで、やつぱりお母さんが私のそばで、姫様（乙姫神）を静かにかかつたんやね。そしたら私がそれについておんなじように神コウダツを言つたんですね。（乙姫神は）『アガイヒオモテノオトヒメジヨウサマ ビロウサモガヤ……』つてかかるでしょう。そしたら同じように、お母さんが教えもしないのに、全くお母さんと同じ口で神コウダツというのを……。まったく口が一緒。もう私も一緒。八幡様も一緒。ほんで『島や誠、シヨウと取れ、誠と取れ』と言うんですね。

で、釜屋におつた炊事場の人たちも来て。姉⑭もね、『Aちゃんね、シケが来た……』。みんな泣いていたです。若い神様、都会から来ているのに、若い神様が、久しぶりにああいいうネーシババを増やすことになったということだ。

「あのときはね、とにかく目がね、大きく、家がぐるぐるまわりました。自分は半分分かっていて、半分分からへん。神様に包まれているので、雲の上にあがっているようでしたよ。ものを言っているのは分かったり。そのかわりね、神様の状態が終わって家に帰ったとき、一晩中ね、頭が痛かった。ほんでね、八幡様と姫様が交互にね、『アガイヒオモテノ』というのと、『ハチマンダユウサマ』というのが交互に出てました。で、(次の日の朝) 母に夕べはこうだったと言ったときに、『神様が乗る人はみんなそんで、お母さんもそうだったよ。一晩中寝られなかったはず』って。頭が痛くてね、『やっぱり神様が、あんたには神がついたよという知らせを、あんたにはな、今日のこの日からあんたにはしっかりと神様を乗せたよという証拠なんだ』って言ってくれました。」

このあと間もなく、A姉は島を離れた。通常、神が乗ったあとは神調べを行って神樂をあげなければならない。いわゆる成巫式である。ネーシババからも「一ヶ月は島にいななければならない。帰ったらいかん」と言われて滞在を勧められた。しかし当時は船の便も悪く、夫の仕事の関係で、大阪に戻ることにした。帰りの船の中でも神声が聞こえてきたという。

(三) 出産

大阪に戻ってしばらくは、A姉は、親戚を集めて神を拝んだりしていた。しかし、やはり都会で神を拝み続けることは難しかった。「神様一本でいこうとしても、トイレの掃除もせないかんし、四つ足は食べないにしても肉もさわらなあかん」ということで、苦勞していた。次第にA姉は体調を崩していった。

体調がすぐれない理由の一つに、A姉は天理教との両立が出来なかった

たことを挙げる。お席運びは島の神をいただいた後も続けられ、残り五席を運びにいつて完了した。A姉は、「例え天理教に入っても、心まで許すことはできない。両方信仰することは難しい。これによって島の神が遠のいたのではないか」と述懐する。

間もなく、A姉は妊娠した。このとき、体調のこともあり、A姉は神に頼んで肉を食べる許可を得た。元々肉は食べられないわけではなかったが、あまり食べなかった。神をいただいてから、ますます食べなくなっていた。

「私が娘を身ごもったときに、私がやっぱり肉も食べないとだめでしょう。神様にお願ひしたんです。『今日から私は肉を口にします。やっぱり子どもが可愛いし、食べられない肉でもどうか食べるようにしてください』と言うたときに、姫様が、女の人の声で、『我が子のためなら仕方があるまい、仕方があるまい』って。子どもが身ごもって十か月、生まれて三か月、まあ十三か月位ですよね。『そこまで許す』という知らせがあつて、さあ、肉を食べましたよ。」

体調が思わしくないという知らせを聞いて、島から母E婆が来てくれた。肉を食べるA姉への周囲の者の発言に対して、E婆は「馬鹿にするものでない」と注意し諭してくれた。

一九六九年四月、無事に長女⑬を出産した。ところが出産後、今度はE婆の体調がおかしくなっていた。このとき、E婆のお祓いにしオバがやってきた。しオバというのは、悪石島出身のネーシである。非常に優秀なネーシと評判の人だが、鹿兒島に転居し、この時は息子のいる大阪にも出てきていた。このときがA姉としオバとの最初の出会いである。

「その時に、島の神々様がしオバさんに神籤をおろして、『(E婆は)

即、島に帰りなさい」ということでね。『島の土を踏まないことにはあなたの病気は治らない』っていうことで。それは素晴らしいことだ。姫様ってこういうすばらしいんだって思いました。」

「（このときに）私が即、お父さんの、まだお父さんが元気なころの生き魂の思いというのがあるんですね、人間にはね。で、お父さんの思いが私にすぐ（かかった）。私も分からなかった、あの時はね。お産して二十日で、身体が穢れているにもかかわらず、私に神様が乗り移って。だから私は遠慮したら、Lお婆さんが、『違う。そなたはね、穢れていない。神の身体だから、遠慮なく』っていうことで。そしたら、『E。帰って来いよ。いつも私は待ち受けているよ』と、お父さんの思いを。……『大阪で病気になるくらいなら、Aも子を産んだことだし、帰って来い』っていうことで、お父さんの思いが伝わってきて。まあ、結局それやこれやでお母さんは帰ったんですね。」

A姉の父はこのときは健在であった。その魂がA姉にかかったのである。なお、この年の暮れ、父は死去している。父の魂がかかったのは、父が弱っていたからというわけではなく、父の寂しく思う気持ちが神に通じ、神がA姉に父の思いを伝えたのだという。

出産後三カ月目、A姉は肉が食べられなくなった。神と約束した期限の月である。このときLオバに電話したところ、「Aには真の神がついている」と言われたという。

「さあ今度ね、あるときにカシワの肉を食べたら、変な話だけど、すっごい戻して。それからもう神様がストップ。『余はカシワは嫌いじゃ、嫌いじゃ』というお言葉があって、『分かりました。ありがとうございます』言うて、もうそれっきり、ぴたっと食べんよ

うになりました。もう絶対だめです。エキスも。四つ足はもちろんのこと、カシワも。全く。本当はカシワは翼のあるもんやから食べても良いことになっているんです、鳥はね。だけど私はカシワも受けつけないです。もうほんまに。あれは不思議でしたよ。あの現象はね、ほんとに信じてくださる人は信じてくださるでしょうけれども。」

長女の出産を契機に、A姉はLオバとの関係を深めていった。長女の蕁麻疹や、ひどかった夜泣きも、Lオバに見せるとすぐに治った。こうしてA姉は、神のことや生活全般のことについて、Lオバという良き相談相手を得て生活していくことになったのである。

（四）初神楽

しかし、A姉の体調は、またしてもおかしくなっていた。「気が落ち着かなく、ノイローゼみたいになった」という。

一九七〇年秋、父の一年忌にあわせて、長女を連れて島へ帰った。島に帰ると、C爺から「神がうろうろしているのに拝まんから体調がおかしくなるのだ」と言われた。村役のネーシも、先年、神が乗ったのに神楽をあげなかったことを後悔していた。それで、神楽をあげることになった。

C爺は男性でありながら神と交流ができる人で、村役のネーシがいなくなった後も祈祷等が続けた人物である。若いころ内地に出ていて臨死体験をし、島へ戻って不動尊を主神として活動を続けている。霊力が強い男ネーシである。⁽¹⁹⁾

C爺、E婆を含め、四人のネーシに神楽をあげてもらった。自分の実家△S△であげた。神楽の太鼓や手拍子はネーシではない親族が行った。母が「神の日は神と祝われ、ホトケの日はホトケと祝われ……」と祝

詞をあげ、これからA姉に神を乗りこませる、ということ言う。ネーシババは次々に島の願いを言った。すると、A姉に乙姫神が乗ってきた。

「その時の拝んだ状態は、悪石のどっかに飛び出して行きたいというのを抑えた覚えがあります。あのね、やっぱり島に何か神様が、島や常世の何かを言いたかったか、それを抑えた覚えがある。でも『涼やかにかかりましたよ』って。その時は、御幣持って、もう、乗り始めじゃないから、もううまいこと、島のね、『世に涼やか世に華やかに、島になんの国になんの国、島とどやけて国とどやけて』⁽¹⁵⁾とか。島の無事も神様のおかげで守られている。そしてね、『波路の里の若きのコマドに駆け寄り召して、島や常世のすべてを読ますから、シヨウと取れ、誠と取れ』という感じで言っとったと思うんですよ。その時御幣も持って、白い着物着て。神役がずっと並んでいるから、ちゃんと立ってて。で、ドンチキドンチキ、ドンドンドンって、神楽と合わせてね、拝みました。それはもう、全部、自分で言いましたよ。(このときは)お母さんと一緒にかかったんじゃないです。私は私で別の神様をよんだと思うんですよ。だからそんなときは立派なほんまネーシ。だから『ああ、Aが(島に)おってくれたらなあ』『よかネーシになっとんねえ』ってみんなが、『もったいないなあ。都会に帰るのはもったいない。ここに住めよう』と言うて。『これだけ神様が好いてて、涼やかにね。ほんと未来の素晴らしいネーシだな』って言われた覚えがあります。(涼やかというのは)自然に、ほんと、胸の中をすっきりとした状態。自然にさらさらという意味ですね。さらさらと神様のお言葉が出ました、あの時はね。」

(五) 憑霊と病氣

神楽をあげて大阪に戻ってから何年間かは体調も良かった。A姉は自宅でマッサージ業を営んでいたから、多くの人の身体を触ると、悪い場所がすぐに分かった。話をする、その人のことがよく分かった。神のことや拝むことに夢中で、神の問題とすぐに結びつけて解釈していた。

「一回目神楽あげて帰ってきたときには調子がよかったですねえ。よく拝めたし。何というのか、人のことがよく分かるいうのか。人の魂でも何でも、ちゃんと夢中だったのね。要するにもう、ちよつと何かあったら結びつけて、いやあ、やってやろうかなあという。こう、ものすごくファイトがあったというかねえ……。」

このころのA姉は、Lオバとの関係をますます強めていった。しかし同時に、いろいろな病氣を経験する期間でもあった。

一九七五年、子宮筋腫になった。医者五回かわったが、快方には向かわなかった。Lオバに相談すると、「水神様に酒をやって祀れ。便所も浄めるように」と言われた。A姉は、夫に焼酎を買いに行かせ、自分は立てないから這っていきながらも祀った。するとたちまち痛みも消え、すぐに治ったという。

A姉は、子宮筋腫になった背景に、ここでも天理教のお席運びとの関係にも触れた。自分の分からないところで神争いがあり、熱を出したりしたのではないかという。

Lオバは「島に帰ったら治るよ」と言ってくれたので、間もなく帰島した。先祖を祀り、神楽をあげてもらった。祖父の七回忌も行い、墓の清掃をした。

大阪へ戻るときには、体調は良くなっていた。医者に見せると、子宮

筋腫が完全に治っていた。しおバは「これは神の力。身体にメスを入れたらだめ」と言ってくれた。

マッサージをするA姉の周りには、多くの人が出入りしていた。その中に、奄美大島出身の人で、田舎で神をもらってきた女性がいた。A姉は、このころ、「自分の祭もさつと済ませて、飛ぶようにこの人の所に飛んで行った」ほどの親密な関係であった。ところが、家に戻るとしんどさを覚えた。あるとき、向こうの家で祭を行い、それが終わって帰ろうとしたら、急に嵐になった。そのとき、娘が「二度とこの人のところへ行かんどこな。目をつぶっていたら、鉢巻した男の人が刀で斬りつけてきた」と言った。この時以降、この人との交流はやめている。今になって思うに、「神様の乗り始めの人はすべて吸収しようとするから、すがられる人の力が落ちるという。まさにそうした状況だったと思うんです」という。

また、マッサージを通して知り合った四国出身の女性がいた。その人の田舎でも母親がA姉と同じようなことをするというで親しくなった。

「話をしているときに、いきなり『春枝』って（口から出てきたんです）。『は？』ってその人が言うんです。『いま、春枝言うた？』って。自分でも分からんかって、『春枝って言うた？』って聞き返して。そしたらまた『春枝』って。『ほら！』『いや、私言うてるやん』って、こうなつたんですよ。『あんたなんで私の名前知ってるの？』『知らんがな、そんなん』って。（A姉は、その人の名前をそのときまで）知らなかったんです。ぼろつと『春枝』って出てきてん。私もそんなときびつくりしましたよ。『春枝、わしはの、四国の母じゃ。懐かしいの』って。『この神様が、神様のところやから』、だから普通はなかなかよばれないけど、『あんたにものを言いたい』って頼ん

だら、この神様が受け入れてくださって、『わしはこの神様のおかげでお前にもが言えるんだ』ということ。ほんでそれからもうね、四十九歳で亡くなって、その時、お前らのお芋茹でて、お前ら遊びに行つて、苦しくつて、（その時の様子を）言い出してな。もう、この人がびつくりしてしまって、兄弟たちに言うてしまつてん。『あんた、うちのお母さんにいつでも会えるで』って。ほんならね、兄弟たちがその人の家に集まつたんです。で、（そのことを知らずに）私は、もうね、着物を着て、その人のところに行きたくて仕方なかつてん。神様が呼んだんですね。（春枝さんの家の扉を）コンコンってノックして。（向こうも、A姉が来ることを知らずに）私の話をしとつたところに、（私が）『御免ください』と言うて。『え、誰か来た』『お母さんや』その人が言うたんですよ。私の方がぎょっとしましたよ、『お母さん』言われて。ほいで、『この人やで』って紹介されて。ほしたら私、名前も知らんのにね、『お前は正夫か』『お前は浩昭か』って名前をみんな呼んで。もうみんな『お母さん』って声あげて泣きましたよ。もう私が、なりきっているんですね、自然に。」

「それからの馴染みで、すぐく通じ合つて。それで、しまいにはお爺さん（亡き母親の夫）までがね、旅行帰りにここに立ち寄つて。そしたら『お父さん懐かしい』っていうことで、（お婆さんの魂が私に）かかつて。そのお爺さんも『わしは驚き入った。ありがと』て言うてな。」

このとき、一九七九年、A姉は急性腎盂炎になった。「このときは、神に向けなかった。寝ていると、死人の樽（棺）が見えて来た」という。このときも、たまたま大阪に来ていたしおバに電話すると、来てくれて、お祓いをしてもらった。すると、出てきたのは四国のお爺さんだったと

いう。そのお爺さんは、A姉と会って田舎へ帰ると間もなく亡くなった。その人の霊がA姉に憑いていたという。

「そのお爺さんが、結局、癌で亡くなりはったときに、私が懐かしくて、亡くなる前に私に会いたいという思いがあったらしくて。何も悪魔として憑いたわけじゃないけれども、私から離れてなかったみたいで。その時偶然にも、腎盂炎をおこしてしまつて。そしてLおばさんが、四時間かかっておさめてくれたんです。その時にね、Lおばさんがお祓いするでしょ。そのときに、私はね、ぱっと起きあがつて、『ご免なさい、ご免なさい』と、『未練がありすぎて。私は何もあんたを苦しめるつもりじゃなかった、ご免なさい』と言つてしたのが、このお爺さんだったんです。で、Lおばさんは、その方を見たこともないけど、『面長な方で、小柄な方で、すごくやさしい人だけど、その人がずっと私（A姉）に憑いている』というこゝとで。私がおさめきれんもんやから、もうちよつとで死の世界にくゝところやつたんですよ、私。」

このときまでA姉は人の魂もかゝることが出来たが、Lオバから「お祓いの力もない、（祓いの）言葉も知らないから、人のことはしない方がいい」と言われ、以後、自制するようになった。A姉がその後述懐するに、「あのまま人のことまで拝むことを続けていたら、命取りになつたかもしれない」という。

こうして、このときもA姉はLオバに救われた。

Lオバにお祓いしてもらつた翌日、A姉はLオバに誘われて何人かで伏見稲荷に行った。伏見稲荷は、Lオバが信仰している神である。詳しいことはA姉も分からないというが、Lオバが都会で暮らしている間に、信仰を始めたようだ。A姉は、伏見は初めて行つた場所なのに、着いた

とたんに先頭に立って歩いていった。「神様が案内しているようだ」と皆から言われた。A姉は、少し熱もあつたが、初めて伏見の滝にうたれた。Lオバが島の神の口を唱えると、A姉の身体も良くなつていくのを感じた。その後、病院からも「腎盂炎は完全に治つたから入院せんでいい」と言われた。

これ以降、A姉は自宅に伏見を祀るようになった。合う神様にお参りするの楽しいものだった。Lオバは、「自分の神をこつこつと修行しなければならぬ。私が親神ということを忘れるな」といい、伏見にも勝手に滝にうたれに行つてはいけない、師につかなければならないことを諭してくれた。

こうして、A姉はLオバを親神とたたえ、いろいろ教えてもらふようになった。A姉には、また島の神が乗るようになり、祀り事も順調にいくかに見えた。ところが、そのLオバが詐欺にあつた。Lオバはショックで自信をなくした。これを見てA姉も自信をなくしてしまつた。「親神こけたら……という感じでした。」

ある日の電話で、いろいろと話したあと、Lオバは「もう切るよ。しんどい」と言つた。これ以降、Lオバとは連絡を取り合つていない。最後のころ、Lオバからは「A姉の神は高いので、却つて自分がしんどくなる」とも言われた。

（六）一九八三年以降

A姉はLオバと離れると、自分としては一生懸命拜んでいるつもりでも、不思議なもので、島の神が乗ってこなくなつた。島に向かつて手は合わせていたが、それ以上のことをしなくなつていった。

これによつてまた自信をなくし、一九八三年、A姉は悪石島へ帰つた。帰るとすぐに、C爺が「神を拝んじよらん。このままではお前はあと三年の命しかない」と言つてきた。A姉は「拜んでいる」と答えると、

C爺は「それは神として言っているのか。人間として言うのなら（嘘をついても）分かるが、神の心で言うことができるか」と聞いた。A姉が答えられずにいると、C爺は「なら、もう一度拝みこんでやる」ということになった。

こうしてお神楽が実施されることになった。しかしそれでは不十分だったので、さらにオットメ⁽¹⁶⁾を行うことになった。この間のことは拙稿があるのでそれに譲るが（川崎 一九八七）、最終的にはこのオットメによって、A姉に乙姫神が乗り込んできて気持ちを語り、以後、神との交流が安定することになる。

翌一九八四年、A姉は、次のように語っている。

「去年（一九八三年）感じたのは、有頂天になってはいけない、しつとりとやっていかなければいけないと言うこと、これを悟ったんです。」

「去年もらった神楽の状態と、前もらった神楽の状態では、すごく差がありますね。前はすごく若かったから、神楽さえあげてもらったら、私はどんなもんでも拝んだらかという、ただもう、まっしぐらという感じだったですね。で、今度は責任をもつてね、慎重に拝んでいますよ、ほんとに。だからそれだけ差があるんですよ。やっぱりとにかくこれまでの失敗がね、失敗というか、乗ってはこう押めなくなったという苦さがあるからでしょう。今度だけは絶対もう二度と失いたくない、それには常に心をつかりと中に据えておかなければいかん。むやみやたらとね、拝んではいかんのやなということが悟られたような感じですよ。やっぱり歳でしょうね、これが。」

八三年の神楽以降、特に些細なことに気を取られなくなったという。

一日と十五日は必ず拝み、毎日のおつとめは軽く済ませるようにしている。神もよく乗る。「本当にC爺には恩がありますよ。C爺のおかげでネーシとしての務めも果たせるようになりました」という。こうしてA姉は、ようやく真のネーシとして独り立ちできるようになったのである。

これ以後、たびたび島に帰り、C爺と神楽をあげたが、同時に自分を引きあげてくれた神々も失っていった。一九八五年に母E婆、一九九二年にC爺が逝去。しかしこれによって調子をくずしたり、自信を失ったりすることはなく、A姉は神との交流はスムーズに行えるようになっていたのである。

④ 成巫とシケをめぐる考察

以上、A姉の出生からネーシとして独り立ちできるまでをみてきた。A姉の生活史を通して言えることは、初めて神が乗ってから安定するまでの期間が非常に長く、その間にもさまざまな病気に見舞われたことである。以下、ここでは成巫とシケの問題に絞って考察してみたい。

（一） 召命をめぐる

ネーシは召命型のシャーマンである。神に選ばれてネーシになるとき、人は思い悩むという。なぜ自分が、面倒臭いことになった、自分にやっていけるのか……。神の召命を、A姉はどのように捉えているのだろうか。

① 巫病の意識について

召命の前にはよくあるといわれる巫病も、トカラ列島のネーシの場合は、不明瞭である。トカラ列島には巫病にあたる言葉がなく、従来の報告でも有無をめぐっては意見が分かれている（安田 一九七二、下野 一

九八二。

A姉の場合、たしかに巫病に相当するものがあつた。神がのる直前、身体の不調を訴えているのがそれである。だからこそ島に帰ろうと決意し、帰ると案の定、神が乗った。

ところが、これを巫病であると素直に言えないのは、A姉自身がこの病をあまり強調せず、神が乗ったことも結びつけないからである。A姉によると、この病の原因は島の神と天理教の神との神争いなのだが、この病は神が乗る前兆だったとは積極的に意識されていない。あくまでも島に帰るきっかけを与えてくれたものに過ぎない。⁽¹⁷⁾

A姉が強く意識しているのは、自分はネーシになるべくしてなったのだという思いである。この思いの前に、巫病の存在は小さくなる。

A姉は、小さいころから周囲の者の期待に囲まれて育ってきた。島の人々は、A姉を評して「神やねえ」とか「神の子」と言い、C爺に至っては、A姉の生まれる前から「今度産まれてくる子は神に仕える子」と言っていたという。そういう評価を聞いて育っているので、A姉も自然と他の人とは違う存在として自らを意識づけていったのだろう。小学校のときには将来ネーシになることを意識し、神のような気持ちで振る舞うようになっていたという。これは沖縄のユタというサーダカウマリの意識である〔桜井 一九七三〕。

「試験の時に（神が）乗ったら困るでしょう。だから（学生時代は）乗らないようにって思っていたんですが、でも、神様に乗ってほしいなあという気は常にありましたよ。ただ、私に（ネーシは）務まらないやろなあ、とも思っていました。」

「鹿児島県首学校時代、船に乗って四日かかって（鹿児島まで）行ったこともあるんです。昔はね、大変長くかかった。（船で）夜寝るときなんか、いろんな人に感謝しながら寝ましたよ。神様のような

状態でいたいという思いが常にあつたんよね。」

②最初のシケ

岡部隆志は、神懸かりの体験が「成巫譚の核をなす〔岡部 二〇〇一九三〕」というが、A姉も、最初に神が乗ったときのことを、四十年近く経つ今も鮮明に覚えている。もちろん、その後の様々な経験を通して過去の様子が脚色されてきたであろうが、この時の体験はほど特異であつたことは間違いない。

A姉は、最初のシケで神の口を唱えたと語る。通常、これは稀なようである。人によって程度は違うが、「何かブイブイと言うだけで、しゃべれないのが普通」であるという。下野敏見は、最初のシケでは震えるだけで神が乗らなかった事例を報告している〔下野 一九八二〕。安田宗生も、最初のシケでは経験をもつ者が神にシケを止めるように願うと報告するのみで、神の名を唱えるとは記していない。神の名を唱えるのは日を改めて行う神調べのときで、神の名を三回唱える（クチボコル）まで行うという〔安田 一九七二〕。

ならばA姉は、最初のシケで本当に神の口を唱えられたのであろうか。神の口というのは、一定のリズムと抑揚の様式化された言葉である。これは神によつて違っている。神のフ（譜）とも言われる。簡単に覚えられるものではない。ここで思い起こされるのは、A姉の記憶力である。A姉は目が不自由である分、記憶力が非常に高い。島の小学校での国語のエピソードがこれを物語る。したがって、実際にどこまで正確に唱えられたかは今となっては確認しようもないが、小さいころから母の背におぶわれていたA姉が、母の唱える神の口を覚えていったとしても不思議ではないだろう。

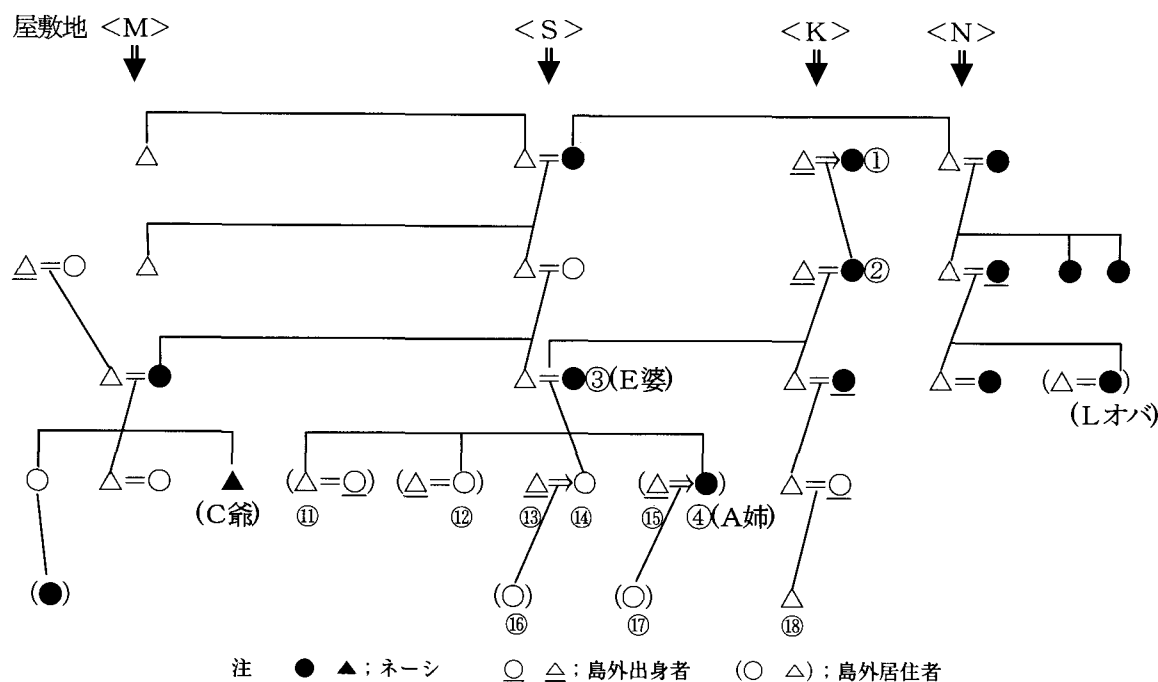
③ ネーシの系譜意識

神をいただいたA姉が強調するのは、母E婆とのつながりである。それは(i)母が生まれた $\wedge K \vee$ で最初に乗ったこと、(ii)その神が母と同じ乙姫神だったこと、(iii)最初に乗った年齢も母と近かったことである。A姉は母からよく「あんたは $\wedge K \vee$ の」代継ぎの神様やからね」と言われてきた。自らも「私は $\wedge K \vee$ からの4代目」と語る。

図1によると、「 $\wedge K \vee$ の代継ぎの神」は、①—②—③—④と続く系譜である。 $\wedge K \vee$ に生まれ育った①・②に続き、 $\wedge K \vee$ から婚出した③(E婆)も $\wedge K \vee$ で最初に神が乗った。そしてその娘である④(A姉)も、生まれは $\wedge S \vee$ であるのに、神が乗ったのは $\wedge K \vee$ においてである。自分の生家ではなく、たまたま祭で行った母の実家で初めて神が乗ったということ、自分は $\wedge S \vee$ でなく、「 $\wedge K \vee$ の代継ぎの神」であるという意識を高めることになった。

島には、「ネーシのあとにネーシ」という言葉がある。ネーシの出やすい筋があるということである。図1を見ると、 $\wedge K \vee$ に限らず、その傾向は見てとれる。ただし、ネーシの出やすい筋が、その家(家族)なのか、屋敷なのか、母から娘へなのか、嫁へなのかは、にわかに判断がつけられない。もともと戸数が少ないうえに、ネーシの数が多かったのだから、このネーシが誰のあとを継いだのかは、系図だけでは説明しづらいところであろう。A姉は母との関係を重視したのである。そのつながりを強調して「代継ぎの神」という表現をとった。

ところで、「代継ぎの神」というときの「神」とは、神霊ではなく、ネーシその人を指す。しかし、代々何を継ぐのかというと、神霊のことである。神霊というのは、屋敷神や家で特別に祀る特定の神などではなく、島で通常祀られている神のことである。したがって、「代継ぎ」という表現で意識されているのは家(家族)でも屋敷でも系図でもなく、「神」のつながりである。代々同じ神が憑依したという意味での系譜意識である。



注 ● ▲; ネーシ ○ △; 島外出身者 (○ △); 島外居住者
①~④はA姉につながる「代継ぎ」の順
⑪~⑱は、小論で登場する主な関係者

図1 関係者およびネーシの系譜

る。

ネーシは多くの神霊と交流可能であるが、ネーシによって憑依しやすい神は大体決まっている。そして、その神の名をとって、「あのネーシは八幡」「あの人は乙姫」などと言われる。その場合、最初に憑依した神がその後も憑依しやすいという。⁽¹⁸⁾ A姉、E婆、そして△K▽のネーシの場合は乙姫神である。

したがってA姉が言う「△K▽を継いだ」というのは、母と同じく乙姫神が憑依しやすいということで、△K▽から出たネーシと同じ神が乗っているということを示すものである。そのような共通感覚が「継いだ」という表現に込められている。⁽¹⁹⁾

乙姫神は、悪石島で旧村があつたと伝承されるとガシに祀られる女性神である。霊力が強く、鎧をまとい、白馬にまたがる勇ましいイメージで語られる。そのような乙姫神がA姉に最初に憑依した。A姉によると、最初に乙姫神が乗ることは非常に珍しいという。実際には乙姫神が憑くことは八幡神について多いのだが、「珍しい」と思うことによって、母や△K▽とのつながりや、自分が何よりも乙姫神に選ばれた人であるという意識を高めている。

A姉と乙姫神とのつながり意識は、幼児期から続く体験談にも反映されている。夜泣きするとき、母に連れられて行ったという△N▽は、乙姫神とされる人骨が出土したところである。⁽²⁰⁾ それで、「姫様と如何に縁があつたか」ということが強く意識されることになる。A姉は、こうして乙姫神とのつながりを生まれつきのご縁と意識し、ネーシになることも当然と受け入れていった。そして最初のシケの際、乙姫神の譜が見事に「唱えられた」ことによって、自分と乙姫神との関係をますます強固なものにしていったのである。

(二) 成巫期間をめぐって

A姉は二十七歳で神をいただいたが、神との交流が安定していたわけではない。神を乗り込ませては中途半端になり、また乗り込ませては続かない。C爺はそんなA姉のことを「ほんまにもつたいない神や」と言っていた。そうなった大きな原因に病氣がある。A姉は、神をいただいて以来、子宮筋腫と腎盂炎という大きな病氣に見舞われている。これは若いころ、「病氣ひとつせんで健康」だったのとは対照的である。二十七歳以降、病氣発症と神樂あげが繰り返された。

こうした状態が解消されるのが一九八三年である。ここまで実に十六年を要している(表1)。本来、成巫は神調べを行った時点で終了する。⁽²¹⁾ これは通常、神が最初に乗った日か数日後である。しかしA姉は、通常の神調べまで三年かかってしまった。その後も神との交流が安定しなかったために、オットメによって安定するまでさらに十年以上かかることになる。神との関係が安定した段階で成巫の完成とするなら、A姉は非常に長い成巫期間を有していたことになる。これには、どのような要因があるのだろうか。

まず挙げられるのは、神調べをすぐに行わなかったことである。A姉は、「島の神を拝まなければ他の(霊)が入ってしまう。乗り始めの時、しっかりと神樂あげていれば……」と述懐している。最初の段階でのつまずきが後々まで影響したというのである。

次に、自分の力を過信して能力以上のことに手がけたことである。先輩のネーシについて習ったわけではないので、自分で勝手に有頂天になったこともあった。他人の霊を扱うなど、慎重にやらなければならぬのに、何でもできる気がして行ってしまった。それが神との関係が安定しなかった理由としてあげられる。

また、これと関連しているが、何よりも大きいのは、島ではなく、

表1 A姉の生活史

年	Aネエ	島のこと
1941	出生	
子どものころ	神を感じる体験が多数	52年 本土復帰 Cジイ帰島
1953	鹿児島へ 兄の住む大阪へ 天理教を知る	60年 悪石島小学校・中学校が本校に 61年～離島振興法適用 →牧畜、道路工事、紬織開始 ～このころから看護婦が島に常住～
1965	結婚	
1967	帰島 → 神がのる	
1969	娘を出産 Lオバを知る 父の生き魂がかかる 肉食できなくなる	
1970	帰島 → 神楽をあげる (神調べ)	父逝去 70年～御岳工事 72年～港湾工事 村役のネーシがいなくなる
1975	子宮筋腫 帰島 → 神楽	74年 村営船としま接岸
1979	四国出身の女性との交流 腎盂炎 伏見稲荷へ Lオバと離れる	
1983	帰島 → 神楽・オットメ (C爺の力)	
1985		母E婆逝去
	帰島 → 神楽	
1992		C爺逝去
1993	帰島 → 神楽	

都会に住み続けたことである。島に住んでいれば、第一・第二の問題も起きなかった。やはり都会に住んだことが霊力を弱めることになった。だから島へ帰って霊力をつける必要があった。島はA姉を都会生活から隔離し、ネーシとして蘇らせてくれる場所であった。「島へ帰ること」は、二重の意味で分離と統合を意味した。⁽²²⁾

都会で暮らすことがなぜ霊力を弱めるのか。A姉は、都会で神を拝み続けることの阻害要因として、次の点をあげている。

(i) 周囲に気を遣い、神の世界に集中できないこと。

島にいれば、周りにはネーシがたくさんいて、神を拝む環境が整っている。しかし都会では、そのような環境にない。肉を扱ったり、トイレを洗ったりするなど、穢れることも多い。周囲の者に何かと気を遣い、気兼ねしてしまう。拝んでいる途中に人が尋ねてくるので集中できないし、拝んでいることに対して無理解な人もいる。「何やってんの」と言われること自体、神が傷つく。

(ii) 神事を習う師がいなかったこと。

特に乗り始めのときは、先輩のネーシがそばについて持ち上げてくれなければならぬ。島ではそうやって代々受け継がれてきた。やはり、先代の風俗や習慣を知った上で行っていくべきである。A姉は、「真に潜んでいるものを自分で引き出すことはできない。私に誰かがついていてくれたら、こんなものではなかったのに……」と言う。引き上げてくれるのに一番良い相手は、やはり母E婆であるという。LオバやC爺も良いが、島の外で得た別の神を信仰している。だから島の神で同じ乙姫神をいただき、島役ネーシを長年勤めた母が一番良いのだという。だが都会で暮らすことで、それが適わなかった。

(iii) 悪石島以外の神や霊的存在との争い。

天理教をはじめ、周りには、他の神や霊が多くついてまわった。マッサージをしていたので、多くの人の身体にさわり、身の上話を聞くことで、自然とその人がもっている神や霊も抱えてしまうようになった。島で神楽をあげてもらったあとは調子がよく、何でもやって

やろうというファイトがあったし、何とか扱えるという自信もあった。しかしそれが逆に自分の力の限界を超えることになってしまった。四国の爺さんの霊が憑いたのも、これが原因であった。

都会では結局一人で拝まなければいけない。しかしA姉は、自分だけが手を合わせ、ひっそりと神を拝むことは味気ないことであるという。そういう状況にもかかわらず、今日までやってこれたのはなぜだろうか。

ひとつには家族の無償の協力があったことである。特に夫は、宮古島出身で親族にも神を拝む女性が多くいたこともあり、協力的であった。娘も霊感が強いうえに、何かにつけて母のために情報を提供してくれた。こうした家族の理解があつて、信仰を保持してこられた。島に帰っても、姉夫婦⑬⑭が非常に協力的だった。

そして何よりも、島の神が自分を欲しているという気持ちで信仰に向かわせている。島にはもうネーシがいなくなり、神が寂しがっているという。だからせめて自分だけは、島の神のために拝み続けなければならぬという使命感がある。⁽²³⁾

「神様というのは『さてアジキナヨ』って。寂しいと言うことですからね。胸の間に寂しさを持つと神様がすぐにね、『胸の間はたいばんじゃ。気いもおよすな、かすがもかけるな、さてアジキナヨと思いわびても』という感じでかかるともね。ああ、神様寂しいんやなあつて。結局ほら、昔とちごうて（神への信仰が）薄らいできたでしょ。昔は何でも悪石の人なんかは神口の指示で動いていたのに、いまは神様のことそちのけというのが普通でしょ。神様も最近あきらめなさつて、あんまりそういうことおっしゃらないようになってたけど。もう仕方がない、これはね。だけど神の世界はいつどん

なときにも変わりはないとおっしゃるもんね。いつでも。ほんとに。」

「先代世時の法度のままに」――時代が変わつて島の生活も変化した、信仰の道は変えられない。せめて自分だけは昔と変わらずに信仰していくという強い気持ちでA姉を支えている。A姉は最近、島の神が全部自分の家に集まつてきているのではないかとさえ思うという。島の現状を思つたら寂しい限りだが、神へ奉仕する思いはいつまでも消えることはない。完全な独り立ちまで長い年月がかかった借りを返すかのように、今は神を大切にして信仰を保持している。

(三) シケをめぐる

ネーシが神と交流する代表的な方法は、シケがかかり、神の口を語ることである。筆者は、このときの様相を、祖霊との対比で説明したことがある(表2)(川崎一九八七)。そこでは、神とネーシの交流は、神籤↓シラセ↓シケの順で進行し、深まつていくと述べた。シケがかかる時の状況について、A姉は次のように語っている。

「胸がぎゅーっと締め付けられてきますよ。言わなかったら大変ですよ、苦しいわけ。自分が。良心に咎めるようなことしたら苦しいでしょう。

表2 霊的存在とネーシの交流の諸相

シケ	シケの部位	霊	譜の有無	形式		交流の進行順
なし	なし	神	なし	神籤		1
あり	上(肩)	神	なし	知らせ		2
			あり	神こうだつ	読む神	3
					説く神	4
			なし	神文言 (口文言)		5
					ほとんどない	
	下(膝)	祖霊	なし	口文言		

(拙稿1987 一部改)

それと一緒にすやんか。苦しいんですよ、言わなかったら。イライラしてくるのよ。何かにでもあたりたくなる。」

「『首が上から肩がはいまに、さららゆりかけ、ゆららゆりかけ』ね。……頭と肩を包むという。そこに神様が『駆け寄り召せば、読まで適おか、説かで適おか』ということ。神様が乗った限りは、口を止めることはできないということです。いくら『言わんどこう、私は違う、あっち行つて』と言つたつて、神様が乗ったときには、読まないわけにはいかない。説かないこともできない。とにかく、読んで説く。神様が言わすことは絶対に、さらさらと。」

最初は、「ものが言いたくても言えない状態」のような、イライラした感じを経験するという。ただし、この感覚はネーシに処理する力がないことに起因するもので、乗り始めのときによく感じるが、経験を積みめば、この感覚はおさまってくるという。

神はネーシの肩から上に乗る。神が言わせようとしている内容は、ネーシはそれを口にしないわけにはいかない。「読んで説く」——これは、神がネーシに語らせる場合の二種類の言い方である。神が乗った直後は「読む神」といい、神固有の譜をともなつて神の名前を列挙する（神コウダツ）。ついで「説く神」といい、神文言で語ったりしながら、神が職能を発揮するのである。これによると、ネーシは神の意志をそのまま受動的に受けているようである。神が言わせる言葉を途中で止めたりしたら、病気になるという。だから乗り始めたなら絶対に最後まで読まなければならぬ。

また、二〇〇六年三月には、次のようにも語ってくれた。

「（神がネーシに乗るのは）相性ではなくて、神様が乗りたいから乗るんです。神様がとにかくね、何と言つたらええのか、パワーをく

ださるんじゃないですか。『首が上から肩が入る』というから、首と肩に神様がぼーんと飛び乗るんですよ。誰かがこう動かしている感じがするんですよ、現に。そう、だから身体がね（上から揺れる）。神様が奮い立たせるから、神様の魂だとおっしゃるから。あ、ちよつと待つてね、今神様にお伺いするからね……。神様の魂が、（私の）心に入るんだそうです。そして、心に入ったら、その、私が入ったことを感じるから、奮い立って来るんですよ、自分が。そして、たらいの間に神様の言葉をくださるんですね。その言葉をひとつ覚えているときと覚えていないときがあるというのは、その、もう自分が、神様になりきるんですよ、その時に。私は人間ですけど、その時はもう神の姿になりきっているの、声も変わるし。神様がね、Aを神に変えるんだとおっしゃっています。その時は、Aじゃない。姫様であり、八幡様であり、秋葉様であり、大山元の大天狗様であり、とかいう感じでおっしゃっていますね。……私も初めて知りましたよ。いい質問してくださつて、ありがとう。神様が直々にこういうお神籤をくださるのも、これだけ成長があるんですね。……あのね、神様が、その、神様の魂が私の心に入ること、私が神様になれるそうです。……人間は黙つとて話すけれども、神様はシケをかけるというのは、やっぱりその、何とか神様の振動なんですね。降りてきたよという振動。」

この内容は、一九八三―八五年にA姉に尋ねても、うまく答えてもらえなかった部分である。あまりしつこく聞く筆者に、A姉は、「神の世界に深入りするものではない」という神籤を下ろして制止した。それが、二〇〇六年では、いとも簡単に神籤を下ろしている。「これだけ成長がある」というのは、そのことを指す。

以上の話を総合すると、神との交流は、次のような手順をふむことが

分かる。

- (i) ネーシはシケがなくても神の声を聞くことができる(神籤)。
- (ii) 神はネーシの肩から上に憑く。それによってネーシの身体は揺れる(シケ)。
- (iii) 一度乗った神を途中で引き離すことは出来ない。ネーシは受動的である。
- (iv) 一度神が乗ると、いろいろな神が次々とネーシの身体に憑く。はじめは譜をとまなう(神こうだつ)。やがて神文言。
- (v) 通常は神のこうだつ内容を覚えていたが、覚えていないときがある。ネーシが神になりきる(このときの語りは口文言になることもある)。

佐々木宏幹は、シャーマンと神霊の関係をモデルで示している。それは、「神や霊の姿・声を知覚し、これらとの交流・通信が行われうる状態(B)」、「神霊・精霊が自己の身体に触れたり、これを締めつけ、内臓に痛みを与えるなどの状態(C)」、「中核的自己が完全に神霊・精霊に取って替わられた状態(D)」であり、BとCを包括的に予言者型・霊感型、Dを霊媒型・憑入型とよんでいる。また、「Bは見者型として取り扱う方が適切であるかもしれない」とも指摘する(佐々木 一九八四 一二六―一二七)。

A姉の生活史をもとに考えると、Bは神籤の状態(i)、Cはシケがかかった状態(ii-iv)となるであろう。したがってシャーマンとしてのA姉は基本的にはCの予言者型ということになる。しかし意識がなくなることもあるので(v)、Dの霊媒型になることもある。このうちBとCは、場面に応じて使い分けられることができるという。すなわちシケをかけるかどうかは、A姉の判断でできる。しかしいったん乗り込んだら、あとは神になされるがままである。Cの状態からDの状態へは、A姉に

はコントロールできない。いつの間にか記憶がなくなり、神が一人称で語っていたことは、これまでも何度かあったようである。⁽²⁴⁾Dの状態のときは神文言ではなく、いずれも口文言になることが注目される。

A姉の生活史を眺めると、このほかにも、シケをかけること以上に神籤が降りる回数が多いこと、神との交流とともにホトケとの交流もよくみられること、不浄時でも神が乗り込んでくること、⁽²⁵⁾ネーシと神の相性や神争いの問題など、興味深い点が見られるが、今回は指摘に留めることにする。

⑤ 水晶の導入と祭祀の変化

二〇〇二年、約十五年ぶりに筆者はA姉と再会した。A姉は、あれからずっと神との交流が安定しているとのことであったが、拝み方には大きな変化がみられた。水晶を通して拝み始めたのである。これにともなって、A姉の神との交流の仕方や神観念などが以前とは異なるものになっていた。これはどのようなことであるのか。まず、水晶購入の経緯からみていきたい。

(一) 転居と水晶の購入

一九九四年、A姉は長年住み慣れたアパートから、近くの別のアパートへと転居した。前のアパートは老朽化して立ち退きとなったためである。新しいアパートは内階段で二階もあり、広くて明るい。非常に住みやすいところである。

A姉は二階の東側の筆筒の上に壇をつくり、乙姫神の祠の写真を右に、昔の実家の神棚の写真を左に飾った。ここは毎朝、東から太陽が浄めてくれるし、神を拝むのに最高のところである。「ここから見える空は島

の空と同じ」と、奄美の姉が言ってくれたのが嬉しかった。

A 姉は、約二十年住み続けた前のアパートに比べて、今のアパートがいかに良いかを強調して語る。前のアパートは「陽があたらないので暗かったし、マッサージをやっていたので多くの人が訪れ、いろいろな悪いものも引き込んでいた。そこでは自分が神を拝んでいたから（自分の身体が）守られていたようなもの」だったという。つまり、A 姉は自らの病気の原因やネーシとして自立できなかった理由に、以前住んでいたアパートの「気の流れ」をあげるようになった。

転居にともなって、A 姉は、マッサージをやめ、さらに家で拝んでいた伏見を稲荷社に納めてきた。

このアパートでA 姉は、二〇〇〇年から水晶を置いて拝むようになった。直径十数センチほどの球体である。通販などで宣伝していたこともあり、以前から欲しかったのだという。電車で十分ほどの商店街に行きに行った。

「前のアパートのとき、私は水晶をもつ資格がなかったんよ。前のアパートでは、家も水晶をもつ位ではなかった。いろいろな霊がいた。水晶を神として迎えたかったから、ここに来たとき、買いたいという思いが強くなった……。」

また、竜・巳の置物も買い、水晶の両脇に置いて、竜神・蛇神として祀っている。どれも水の神である。蓮も買った。蓮から出る十二本の金糸が天に伸び、先祖が昇っていくのを助けるのだという。他にもさまざまな置物を置き、念力をかけて守ってもらうようにしている。このほか、護符も購入している。これは自分の名前とコウモリが彫られているカードである。長女によると、水晶が水明学で、護符は姓名学である。これらが一体になって守ってくれるのだという。こうした知識は、長女が本

に書いてあることをノートに書き写してくれたのを読んで得た。

それにしても、なぜ水晶なのだろうか。A 姉の話を総合すると、四つの理由があげられる。一つは水晶自体がもつパワーである。

「この水晶パワーというのは、ほんとに、念力で神様のもとにそのまま届くんですよ。水晶パワーというのはね。私は古いじゃないから、そんな専門じゃないから分からないけど、水晶で全部見える人もいるもんね、現に。私は悪石の神様がついてきてくださるから、それは必要ないんですよ。ただ私は、水晶を持つことで神様の御座を全部浄めていたでいて、それでいて、真っ直ぐな状態、太陽の如くに真っ直ぐな状態をそのまま……。私の心と言葉がね、心があるまま水晶に乗ること、水晶がそれを空気と、澄み切った空気の中で全部神様に（届けられる）。だから、水晶パワーは澄み切っていて空気がきれいなもんだから、そのまま一体となって、心にもうつるし、目にもうつる。ということ、鏡と一緒にね。鏡を見ているようなもんですよ。」

神を拝むとき、A 姉はまず水晶に、そして竜神・蛇神などの置物をお願いをする。それによって自らが浄められるので、悪石の神も最初から気持ちよく対応できるのだという。

以下、ここから派生してくることであるが、二つ目は線香の代用としてである。線香の煙は神と交流するのに必要だが、A 姉は目が不自由なため、普段から線香や蠟燭をつけられない。だからその代用として水晶を利用したというのだ。

「私がまずね、線香や蠟燭つけられないでしょ。慣れないということ。火事になるのが怖いんですよ。だから線香使わずに、どうか許

してくださいとね（そう言って、以前は拝んでいました）。電池の線香もどつかその辺に売ってるけど、やっぱり煙ですから。煙がご馳走ですから。そんな半端なことするくらいやったら、だから水晶パワーを線香のかわりにというか、蠟燭のかわりに、水晶パワーで。」

三つ目は、都会で拝んでいることへの対応である。A姉によると、水晶は神と人とを仲介する。だからシケがかからなくても神と交流できるようなことになるという。これによって、都会でシケがかかることの気まずさから解放された。

「都会やもんで、大きな声で拝まれないですよ。だからシケもだんだん遠ざかっていったんです。そやからその分、水晶さんをお願いして、神様、どうか離れないようにということ。」

四つ目は、島の神への配慮である。水晶を利用することで、島の神に難儀をかけなくても済むようになるという。ネーシは憑霊型のシャーマンであるから、本来は神がネーシの身体に乗り込んでくる。すなわち、神は島から大阪にいるA姉のところまで空を飛んで来るということになる。しかしA姉は、それでは神に申し訳ないと思う。だから水晶を置くことで、神が空を飛んで大阪までやって来なくても済むようにした。水晶がA姉と神双方の思いをそれぞれに届けてくれるのだという。これによって、悪石の神は島にいながらA姉に意思を伝えることができるようになるという。

「これはあくまでも、神様にご苦勞をおかけしてはならないということからね、悪石の神様一途に頼ってたら、島の神様あっちゃけも

ち、こっちかけもちで、大変なご苦勞やから。水晶があれば、私が神様に一々お尋ねしなくても、神様が、ご苦勞することが五で済むかなって。」

こうして、A姉は水晶という新しい手段で、神と交流を続けることになった。

（二）水晶の効果

A姉は、水晶を風水と結びつけて語る。

「私は水晶を持つことで、風水と出会いました。……私は詳しいことと風水を知りませんが、ただ水晶を知ることによって神様が非常にご苦勞がなくなるんです。今までだったら、直接、ほんと、悪石からね、『大空おしかけ雲空おしわけ』て来てくださるこの神様は、（二階の箆筒に島の）写真があるがゆえに自ずから来てくださるんですが、風水を知ることによって、神様が非常に働きやすくなるんですね。」

水晶を通して拝むことで、これまでみられなかったさまざまな効果が得られるようになったという。

まず、シケがかからなくても交流ができるので、非常に楽になった。また、拝む時間が非常に短くなった。これらは都会で神を拝むには好都合である。拝んでいる最中に客が来て中断される心配がなくなるからである。

「水晶を先に抱いて、水晶を念じてから神様のところに行くと、神様がすぐ傍に、遠いところなんですけど、水晶さんが神様のもとに橋渡しするんで。これね、変な話、一時間かかるところが三十分

縮まり、今はね、一秒もかからないです。水晶パワーが強いから。……私はお陰様で苦勞をしなくても水晶を抱いて西の方に向いて拝んでいます。神様に向く前に。ほんならね、その願いがね、何でも、ほんとに何でも、叶えて。」

さらに、水晶を置いたことにより、人との付き合いにも変化が出てきた。引越したといっても決して遠いところに転居したわけではないのに、因縁の強い人は新しいアパートに寄って来なくなったという。

「本によると、水晶は、因縁の深い人を寄せ付けないといえます。前のアパートには多くの人に来ていて、それで自分も病気になるってしたんですね。お祓いをする必要があった。ここに来てからは、ここには自然と来なくなる人もいるから不思議なものです。」

そして何よりも、神との関係が安定するようになった。水晶は神の忠実な家臣として、いつでもA姉の思いを届けてくれ、また神の言葉を即座に届けてくれるという。神との交流が以前に増して太くなった。

要するに、水晶球を置いて拝むということは、先に挙げた都会で神を拝むことの阻害要因がきれいに解消されたことになる。

(i) 周囲に気兼ねして気を遣う必要がなくなった。水晶はあつという間に神とつながるので、短時間でもできるからである。

(ii) 師匠がいなくても行える。水晶を浄める必要があるが、本に書いてあるので、確認して行えばよい。あとはすべて水晶が神と自分をつないでくれる。

(iii) さまざまな霊的存在が入ってくるのを防げる。水晶が、他の存在を寄せ付けないので、安心できる。

A姉は今、私生活も大変充実している。悩みが押し寄せてこなくなり、自分の願いが悉く叶えられているという。以前から得意だったカラオケも、市民祭や県大会で優秀歌唱賞や優勝に輝いている。視覚障害者福祉協会に所属し、ボーリング、卓球（サウンド・テーブル・テニス）、ハモニカ、ハンドベルなどさまざまなことに果敢に挑戦している。生活に張りがあるので、気持ちも非常に若い。今もカラオケや卓球で練習に汗を流す毎日である。

「私が間違っていたら、悪石の神様と水晶が合わずに、間違っていたら、いま私はこんなしておれないと思います。正しいからこそ、幸せになっていってると。」

こうして、A姉は信仰も生活も安定するようになった。長年悩まされてきた問題に対して、水晶を置くことは、一番良い解決策であったわけだ。

(三) ネーシとしての交流の変化

水晶の導入は、A姉と神との関係を大きく変えることになった。

A姉は、ネーシとしての活動は、前のアパートにいたときの方が活発だったという。シケはよくかかり、神籤も次々におりていた。その理由として、(i) マッサージをやっていたので多くの人に来ていろいろな霊がいたこと、(ii) 当時は伏見を拝んでいたことで島の神が対抗して積極的にかかってきたこと、(iii) 近くに宮があったことなどがあるのではないかという。

それが転居を経て、水晶を置いたことにより、シケがかからなくなった。水晶が仲介するために、神はもはや空を駆けて来ないのだから、そ

の徴としてのシケは必要ない。いま、シケがかかるのは年に一回、元旦だけであるという。この日、A姉は白装束に正装して神を祀る。この時以外はシケがかからなくなったという。

「今でもかかろうと思ったらかかりますよ。かかるんだけど、これはもうやたらとね、こんな格好で、それこそ白帯でもつけてするんやったらええけど……。こんな格好でね、してもあかんのかなあと思ってね。」

A姉は、シケがかかるのは特別の場合であると意識するようになった。神を正装して迎えるべきだという。シケによる神こうだつは、ハレの行事になった。

シケがかからないかわりに、神籤のおりる機会が増えた。神籤は、ネーシの心に直接響くもので、口に出して語られることはない。水晶を通しての交流は、神籤である。したがって、神の語り口は神文言から口文言に変わってきた。シケがかからないので、神文言で言う必要性もなくなったということだろう。

「拝まずともシケをかけずとも、すべて、今度はね、『神コウダツもたまには知らすけれども、神通力願通力、そして口文言で何でもお知らせするよ』っておっしゃるんですね。だからいつも声が聞こえるんです。」

しかも、こちらからお願いするときは、島の言葉でなく、都会の言葉で分かるという。ネーシは神と交流するとき、本来は神の言葉で語らなければならぬ。これはネーシが神と交流するときの暗号であり、ルールであるという。「キミ（人間）の世と変わいいでも、神座のもととは

先代世時の法度のままに、変わいさもなか、変わいこえなか」と言われる。ところが、そのルールが緩和され、通常の口調でも最近では通用するようになったという。これも水晶が仲介する効果であろう。

水晶を通して拝むようになって、A姉が交流する神も変化してきたという。

以前は島にいる神であり、その中心は乙姫神であった。それが、最近では多くの声ができるようになったという。

「（以前、神籤が降りたときの声は）やっぱり姫様でした。ほんで、いまは、やっぱりこう、男の人の声。まあ、先にかかるのは姫様ですけど。だから多分ね、姫様は安堵な状態で、男のお釈迦様やら、八幡様、姫様、一体となって、多分後ろについてくださる状態があつて。不動さんの声も聞こえてくる。あれはやっぱりC爺でしようね。きつと。」

「お母さんの声が姫様かも知らん。（前よりも声をかけてくださる神の声が）広がりましたね。何人もの神々様が、次から次へと、（神が）『大丈夫』とおっしゃっても、（私が）『ほんとにそうですか、ほんとにそうですか』と聞くでしょう。いろんな方（神）が、これでもか、これでもかという感じで（答えてくれます）。それでも私が尋ねたら、『大丈夫というたら大丈夫』、『それでも分からんか、そんならこの神に聞いてみ、この神に聞いてみ』という感じなんですよ。うね。」

しかも、多く聞こえる声のうち、最近では男の人の声の方が強くなったという。特に、神籤の結果に確信があるときは男の人の声である。それが誰であるのか、なぜ男の人なのか、理由は分からないとのことであったが、A姉は、その声の主をお釈迦様と解釈している。A姉の実家の西

隣に釈迦堂があり、実家へS/Vで管理してきた。

「悪石に釈迦堂があるでしょう。あのお釈迦様がそのままついてきてくださっていると確信しています。いつもでね、ぱーっと大きな掌を広げてね、袴の姿の方が目に映るんですね。この方お釈迦様だと思うから、『八百万の神々、お釈迦様共々』とお願ひしています。」

このように、A姉と神との交流は、シケを通して神文言を口にするという伝統的なネーシの方法から、水晶を使用し、御籤によって口文言で神の声を聞くという方法に変わってきた。しかも、乙姫神という島で祀る女性神から、釈迦という男性霊へと、交流する存在が変化するようになった。水晶を置いたことで、A姉には想像以上の変化と効果がもたらされている。

(四) A姉の位相

A姉のこのような変化は、ネーシとしての彼女にどのような変化を与えているのだろうか。

先の佐々木宏幹の分類にならうと、水晶の導入によってシケがからなくなり、神籤が増えたということは、CからB、つまり見者型に移行したことになる。憑霊型シャーマンは、何よりも憑霊によって職能を発揮する。そうすると、A姉のこの移行は、A姉の霊力が衰えたことを示すのだろうか。またネーシの力は、シケの強さや神こうだつの立派さによって周囲にも認知されてきた。そうすると、A姉はネーシらしからぬネーシになったことを意味するのだろうか。

そうではない。A姉は、シケはかからないものの、以前に比べて今の方が神を近くに感じられるという。シケをかけないというのは、一つには加齢への対応として考えることもできる。通常、加齢にともない、

ネーシのシケは穏やかになっていくからである。毎回シケをかけて乗り込ませるのは、体力的にきついであろう。水晶によって瞬時に神と交流できるので、神との関係は今のの方がはるかに安定しているという。

「だからね、いま現在というか、神様の、ほんとに、都会に居ながらにして、ますます神様が深くなり、一体と神様となれるということは、多感になっていく。水晶パワーも両方持っているんで、神様が非常に、守ってもらいやすくなった、守りやすくなった。神様に難儀をおかけしなくていいな、という確信がありますね、今は。……今こうしてお話させていただくに、水晶さんが常に神様と一体というか、パイプ役、つなぎ役してくださっているんで、いつも神様とほんとに、すぐ近いという感じですね。」

「(悪石の神様は)願うことが可愛い子どもとして、神様はいつまでも待ち受けているんですね。『願いなさい、願いなさい。願えば何でも叶えてやるぞ』と言うことで。水晶さんも同じで、願ったものをそのまま受けて、神様に伝えてくださるんで、神様からの効果というか、自照証拠というです、それがすぐ現れてくるんですよ。」

「だから言う人に言わせたら、この家は社になっているそうですよ。はい。この家全部全体、お社になっている。それだけ空気が清まっているんですね。もう今ね、水晶さんが喜んで、神様も言え言え言え言えと、もう神様がおしていますね。いま私をね、どんどんどんどん話しなさいって。」

また、ある意味でA姉の最近の言動は、ネーシという島世界の伝統を離れて、都会的になったようにみえる。水晶を置き、風水を語り始めたこともそうであるし、神の声が男性になってきたというのもそうである。

岡部隆史は、シャーマンと神の関係が男女として現れるというのは、「割合普遍的なもの」で、「その場合、神が男でシャーマンが女である場合が一般的である」という〔岡部 二〇〇一―一八三〕。A姉の場合も、乙姫神という島世界の神観念から抜け出したとも受け取れる。

さらに、ここ一二年のことであるというが、神を拝んでいると、自分の心が筆筒に置いた島の写真のところにあって、そこから自分の身体に向けて言葉を発している感覚を抱くようになったという。

「私が水晶さんを抱いてお願いして神様に向くときは、シケはかからないけれども、自分がね、神のそばに行ってるんです。自分がということは、こう、ほんととはここ（筆筒に置いた写真）に神様がお祀りされてるんですけれども、私の心は自分で自分が、私がこうして神様拜むでしょう。たとえば写真、たとえば神様の。ところが自分の心はそこ（写真）にあるんです。だから身体だけがここにあって、心はそこにあるから、自分の思いが、私が言う思いが全部そこ（写真）からここ（自分の身体）に伝わる。ほんとやったら、ここで口で言ったもんがあつちに伝わるでしょう。ところが自分の心がそこにあるもんやから、私が言うことは、そっち（写真）からこっち（身体）に伝わって来るんです、逆に。私がたとえば神様、何々でお願いしますっていうことするでしょう。そして私の心がそこにあるから、不思議な、これはね、不思議な状態なんですよ。普通は私がここでお願いをして、初めてそっちに行くでしょう。ところが水晶さんは私が、あの、どういうんかな、置いた状態は神様の……。だから結局、水晶さんの、その、お願いする自体で、というんかな……。私の心というのは、神様がそのまま、あの、持つてらっしゃる。私の心を持つというんかな、持つて、こう……、

受け取るというのかな。神様がとるんです。とるというのは、ほんまにとってしまったんやな、うちの心を。だから私は自分の身体……、だから魂は神様のところにあつて、身体そのもの、かたちはここにあるんですけれども、私がこう言葉を言うでしょう。そしてそっちから私……、自分の口が動いて来るんですね。分かってくれる？」

A姉自身もまだ十分には説明できない感覚であるようだ。このあと、筆者とのやりとりは次のように続く。

―分かるような、分からないような……

「そうでしょう。」

―身体はここにある。

「そう。」

―心はぬけて……

「そう、心が抜けて神様のもとに行つて……。」

―神様のもとというの？ 心は悪石の神様まで行っている？

「うん、神様の写真のところですけど。写真のところにあるから……。でもそれは悪石のところに行っているかもしれない。私には分からないです。ただ、もう、とりあえず悪石に行っているんでしょう。ということは、私がそこでシケがかかったときには、千里が灘から万里が灘から今現在駆け寄り召して……。どういふんな、大空押しかけ雲空押し分けて。早いですよ、神様ね。なんであんなに早いんかなって思うんやけど。」

このあと、A姉の語りは交流の速さに話題が移っていったので、心がどこまで飛んでいくのかは追求していない。おそらく追求してもこれ以

上は出てこないであろう。A姉は、自己の心が身体から遊離し、少し離れたところで神と一体化しているという。それは島の写真のところである。写真を通して島の神と直結しているという感覚である。これに従うと、少なくとも、A姉の状態が憑霊型に関する佐々木（一九八四）の分類とは違う状態にあることは確かであろう。また、一般の脱魂型シャーマンのように、神界へ赴くというのでもなさそうだ。憑依型と脱魂型の中間、または移行過程にあるということになるだろうか。しかも特筆すべきは、シケのようなトランスがないままで行っている。A姉は、都会で水晶を通して拝んでいるうちに、神との交流をまた新たな段階へと深化させたことになる。

⑥ 島への憧れと疎外感―結びにかえて

これまで述べてきたことをまとめると、A姉の信仰のあり方は、次の四つの時期に分けられる。

第一期	成巫前	神に対する憧れが強かった時期
第二期	成巫後～一九八三年	神を得て、その力を最大限活用しようとする。務めたと同時に、病気になるなど交流がうまくいかずに悩んだ時期
第三期	一九八三～二〇〇〇年	自分の限界を知り、神のために拝んだ悟りの時期
第四期	二〇〇〇年～	水晶を通して神との一体感を感じる時期

これを通してまず言えるのは、首尾一貫している神への強い信仰心である。A姉は、神との交流がうまくいかなくとも、悪石の神を慕い、

交流がうまくいくようにはかっってきた。

また、A姉が神のことを話す語り口を通して感じられるのは、島の伝統的な生活への憧れである。ネーシがたくさんいて、神と人とが通じ合っていたという観念的世界である。実は、島では、ネーシがたくさんいる状態は決して良い状態であるとは語られない。神がそれだけに伝えたいことがあるということで、世の中がうまくいっていない徴だと説明される。ところが、A姉はそのことを知っていても、もつと神と交流する機会が増え、もつとネーシが出ればよいと思う。

これらの思いは、やはり都会で暮らしたことと無縁ではないであろう。都会で暮らす故に第二期の揺れがあり、第四期の水晶の導入があった。それらを通してますます神への信仰を深めていったのである。

「私にとって神とは、自分の生きがいです。信仰なしでは生きていられないというか、神とともに……。神がぼつこい私についていこうとしているんよね。神から離れることは、もうできないですね。」

この信仰生活が大きく変わるのが、やはり第四期、水晶を導入したところである。これははからずも、A姉の信仰のあり方から神との交流の仕方、生活の仕方まで、多くの場面で従来のやり方を変えるものになった。特にその交流の仕方は、もはや伝統的な島のネーシとはいえないものになった。同時にこの時期、A姉は、神と交流することを積極的には口外しなくなったようでもある。第二・三期にはマッサージをやっていた関係もあり、多くの人がA姉の元に入りし、違う神や霊との交流もあった。しかし転居と水晶の導入を経て、いまは一切行っていない。水晶を置いて拝んでいることを知っている人はごく少数になった。この変化も第二期の経験が影響している。

こうしてみると、今日のA姉の信仰のもとをつくっているのは、第二期であることが分かる。この時期に大病を経験し、神との交流に悩んだことが、今日のA姉の考え方や信仰の態度を生み出すこととなった。都会の生活はA姉のネーシとしてのあり方に大きな影響を与えていった。

しかし、A姉はやはり島のネーシである。敢えて島のネーシであることを選んでいく。最近聞こえるようになった男性の声の主は、島にいるお釈迦様であると解釈している。島の神以外の神や人の靈魂を扱うことは、今はしていない。他人の霊を扱うことも、四国のお爺さんの一件以来、行っていない。水晶を置いたことによつて、他の霊との混信を避けることができるようになった。水晶という、より一般的な祭具を扱っているが、島の神との交流に限定して使用している。また、A姉は、新興宗教のように新たな信者を獲得することはない。たまにA姉の力を慕って寄ってくる人もいるというが、A姉は丁重にお断りしている。A姉はただ、島の神のために祈りを捧げ、そのために良かれと思うことを行っているのである。

A姉は、自分の霊力を利用してより多くの人々の問題を扱えるシャーマンとしての道よりも、島の神に奉仕するネーシの道を選んだ。A姉はあくまでもネーシである。

しかし、神への思いを強くすればするほど、A姉は島から遠ざかっていくのを感じている。実は第三期に、A姉は何度か島へ帰っていた。そのたびにC爺とともに神楽をあげた。あるときは自分の姪^⑩に神を乗り込ませようとしてみたり、夫を連れて戻り、実際に暮らせるか島の親族と相談したりした。しかし結局、新しいネーシは誕生せず、島で暮らすのもさまざまな制約があつて難しいとの結論に至った。C爺逝去の翌年（一九九三年）に行つて以来、島には戻っていない。

現実の島の生活は、A姉が温めていた観念的世界とは違う。昔と違つ

て、伝統的な姿とは違つてきている。いま、表だつて神を拝む人がいないので、もし自分が帰つたら、島の神々が懐かしがつて、ひっきりなしに自分にかかつてくるという思いがある。ネーシとしての務めができるのだろうか。島に帰るのが怖い。また、乙姫神がいるヒガシも、今は牧場になっている。島へ戻つても本当に帰る場所がない気がする。そもそも、水晶で拝むというこの形式を、島の人は受け入れてくれるのか……。さまざまな不安がA姉を襲う。

水晶を置いたことも島へ帰ることを躊躇させる原因であるが、水晶を置いているから島へ帰る必要もなくなったともいえる。水晶は神を引き寄せ、島にいるときと同じような信仰が出来るからであるし、水晶は管理が大変なので、短期間でも家をあげるわけにはいかなかったからでもあるという。

A姉は、いま、ぐいぐいと神に引つ張られている感じがするという。神への信仰を深めれば深めるほど、現実の島に対しては疎外感を増していく。こうした矛盾を抱えながら、現代を生きている。

謝辞

この稿をなすに当たり、A姉および御家族の皆様には本当にお世話になりました。途中十五年ほど間があいたにもかかわらず、時の経過を感じさせないほど多くのことを語ってくださいました。「島の神の話をしているときが一番楽しい」「神も喜んでくださる」「持ちつ持たれつ」……。同じ話をせがむ筆者に、いつも快く応じてくださいました。この稿はひとえにA姉の協力なくしてはあり得ません。ここに謝して御礼を申しあげます。

註

- (1) 奄美・沖縄地方の多くの集落においてノロ祭祀は今でも健在である。しかし、ノロは集落内の祭祀を行うために、たとえば奄美大島宇検村においてノロ祭祀が行われなくなった集落も存在するが〔高橋編 一九八九〕、ユタは集落をこえて活動できるので、人々は頼ることができるといえるわけである。
- (2) トカラ列島の民俗学的研究として、下野敏見(一九六六)、安田宗生(一九七五)などがある。
- (3) この視点は、川村邦光(一九九七)から大きな示唆を受けた。
- (4) この語りはテープからおこしたものであるが、筆者の責任において、一部を省略し、文意を通りやすくしている。なお、(一)内は筆者の補注である。
- (5) 小論において、△▽は屋敷地を示すことにする。ただし文脈によって、家の意味でも使用している。
- (6) 小論において、⑪⑫の数字を附した人物は、図1に親族関係が示されている。
- (7) 神が語る言葉で、子のいる男性のこと。同様に、幼い者をタマのオノコ、若い者をハナのコズエ、子のいる女性をチブサの母、若いネーシをワカキのコマ(ド)、年輩のネーシをノリのコマ(ド)という。悪石島のことにはナミジノサトと言われる。ネーシが神にお願いをするときにも、このような神言葉を使用しなければならぬという。
- (8) 第二次世界大戦後、北緯三〇度以南は日本から分離され、米軍軍政下に入っていた。サンフランシスコ講和会議を機に北緯二九度以北が日本に帰属されることになり、十島村は日本に復帰した〔十島村誌編集委員会 一九九五〕。
- (9) A姉は十回足を運んだから「ジッセキ」というが、別席のことを指すようである。西山輝夫によると、「別席とは、天理教教会本部の所在するちばにおいて、天理教教規の定めるところに従って任命された取次人から、月日のやしろである教祖を通じて啓示された親神の教えを聞かしてもらうことであり、同一内容の話を九回聞かしてもらって満席になると、さづけの理が渡される。従って、別席を運ぶことは、正式の信仰への入口であり、さづけの理をいただくための前段階である〔西山 一九六八 二〇一〕」という。
- (10) 島の東側にある女神山北側の沿岸をさす。ここには以前、集落があったが、現村落の住民との間に紛争が発生した。これを機に、東の集落の人々が現村落に移り住むことになったという伝承がある〔川崎 一九九二〕。
- (11) シケがかかっても、神かケンダイモノ(魔)か分からないので、「本当に神がのつたのかを確認するために行われる〔安田 一九七二 三四〕」ものである。
- (12) 当時は第二十島丸(二五三トシ)で、鹿児島と十島村各島間を月四往復していた〔十島村誌編集委員会 一九九五〕。
- (13) シケをかけないで神と交流する方法。詳しくは川崎(一九八七)参照。
- (14) C爺のことは、安田宗生(一九七四)に詳しい。
- (15) 島や国に何事もないうちに、無事を祈ります、という意味。
- (16) 神楽は太鼓・鈴・手拍子・御幣・米・数珠・神酒を使用する。オットメは米・数珠・神酒のみで行うという。
- (17) 誘導尋問をすれば、A姉は「巫病」であったと認めるかもしれない。しかし、敢えてそのような質問はしていない。A姉の語り方、考え方を尊重し、その線に沿った確認の質問をした限りによれば、「巫病」としての意識は低いということになる。
- (18) これについては、関係がないという人もいる。
- (19) しかし△K▽と乙姫神との間に特別な伝承や関係があるわけではない。
- (20) この経緯については下野敏見(一九六六)参照。下野によると、昭和三三年ごろのことである。
- (21) ネーシの成巫やイニシエーションという用語は二種類の場面で使われてきた〔下野 一九八二〕。ネーシというシャーマンになるときと、村役のネーシになるときである。ここでは前者の場合に限定して使用することにする。
- (22) 言うまでもなく、通常の意味での都会生活からの分離と、ファン・ヘネツプが「通過儀礼」で示したような意味での日常からの分離である〔A・ファン・ヘネツプ 一九七七〕。A姉にとって、島はネーシになるために必要な「集会所」であった。一定期間の「籠もり」を経た後に、ネーシとして再生するのである。
- (23) 島で新しいネーシは誕生していない。A姉に神が乗ったのと同じころ、7歳で神がかった少女がいたが、両親は「どうか神が乗らないようにしてほしい」とネーシに頼み込み、ネーシにはならなかったという例もある。はつきりと確認はとれていないが、悪石島でネーシが誕生したのは、A姉が最後のようである。島の外では、悪石の神が乗った出身者もいる。
- (24) たとえば、一九七五年に四国のお婆さんが娘たちの前で語ったとき、同じく四国のお爺さんの魂がかかったとき、一九八三年のオットメの際に乙姫神が最後に口文で語ったときである。この他にも何度かあることが確認された。
- (25) 最初のシケがあったとき、A姉が生理中だったということも考察対象になろう。A姉は長女の出産後も神が憑依している。ネーシと不浄観については興味深いところであるが、いまは指摘に留めておく。

参考文献

- 岡部隆志 二〇〇一「柳田国男『妹の力』とシャーマニズム」岡部隆志・斎藤英喜・津田博幸・武田比呂男『シャーマニズムの文化学—日本文化の隠れた水脈—』森話社
- 川崎史人 一九八七「シャーマンと神・祖霊—トカラ列島のネーシの場合—」『民俗宗教』一 創樹社
- 川崎史人 一九九二「対比と収斂の世界観—トカラ列島悪石島におけるトンチとヒガシをめぐる—」『南島史学』三九
- 川村邦光 一九九七「憑依の視座—巫女の民俗学Ⅱ—」青弓社
- 桜井徳太郎 一九七三「沖縄のシャーマニズム」弘文堂
- 佐々木宏幹 一九八四「シャーマニズムの人類学」弘文堂
- 下野敏見 一九六六「吐噶喇列島民俗誌（第一巻悪石島・平島編）」自家版
- 下野敏見 一九八二「トカラ列島ネーシのイニシエーションと機能」『鹿児島大学法学部紀要人文科学科論集』一七
- 田中正隆 二〇〇五「地域社会における祭祀の持続と変化をめぐる一考察—トカラ列島の事例から—」『日本民俗学』二四二
- 高橋統一編 一九八九『奄美伝統文化の変容過程』国書刊行会
- 十島村村誌編集委員会 一九九五『十島村誌』十島村
- 西山輝夫 一九六八『天理教とは何か（下巻）』天理教道友社
- A・ファン・ヘネップ／綾部恒男・裕子訳 一九七七『通過儀礼』弘文堂
- 安田宗生 一九七二「トカラ・悪石島のネーシに関する覚書」『民俗学評論』九
- 安田宗生 一九七四「鹿児島県十島村の男巫女」『西郊民俗』六六
- 安田宗生 一九七五「悪石島の農耕と年中行事」『えとのす』四

（昭和女子大学中高部、国立歴史民俗博物館共同研究協力者）

（二〇〇七年九月十四日受理、二〇〇八年二月二十八日審査終了）

Present-day Neeshi : In an Island and city Interval

KAWASAKI Fumito

This paper examines how a shaman living in the city away from her native village maintains the village's "tradition" and continues to communicate with the village's kami while under urban influences. It focuses on the nature of communication, primarily trances, and changes to this communication while the shaman aspires to the tradition of worshipping the village's kami at the same time as leading a life in the city in which she has frequent contact with people and information.

The subject of this study is a woman (referred to as Ms. A) who comes from Akuseki Island in the Tokara Islands. The Tokara Islands maintains a tradition in which women called "neeshi" communicate with kami and are involved with village rituals as well. Having been visited by kami when young, the islanders regarded Ms. A as a promising future neeshi. However, Ms. A was already living in Osaka and circumstances necessitated that she live away from the island.

Although she continued to communicate with kami while living in the city for the next 17 years, she constantly complained of ill health. When she became seriously ill she returned to the island, whereupon she performed kagura and continued to follow a lifestyle that would return her body to normal health. Once she had stabilized her communication with kami she incorporated the philosophy of Feng Shui, and so came to use crystal balls for worshipping kami. This had the effect of relaxing Ms. A's body to the extreme, thus eliminating any impediment to worshipping while living in the city. However, this brought a huge change to Ms. A's role as a neeshi in that she no longer used trances as her main form of communicating with kami.

In Ms. A's case, this change is related to her sense of distance from her native village. This came about through the conflict between a yearning to live in her village where the kami reside and a sense of loss regarding the village in her current life which had diverged from a traditional lifestyle. Holding the kami in high esteem, the stronger Ms. A's sense of loss became the stronger her religious beliefs and practices grew. However, this also had the effect of increasing the distance between herself and contemporary island life. The paper discusses this dilemma based on Ms. A's narrative.